一、粘土細工の特色

1、曲面的立體構成が出來ること

他の多くの手工材料が直線的平面的な形を基礎として構成せられるのに反し、粘土細工は曲面的の形を基礎として然も立體的に構成せられるのであるから、曲面美表現の練習をさせその陶冶を圖ることが出來る。

2、材料が柔軟で表現が自由であること

粘土は水で捏ねて適當な粘性をもたせると各種の形象が自由に圓滿に表現される。又意のまゝに修正し或は容易に改作することも出來るので、兒童は自己の腦中にあるモチーフを自由に表現することが可能となり、その作爲には兒童としての創作心が働き、これが能力は藝術心の向上となるのである。

3、兒童の思想感情の立體的表現に適すること

粘土細工は兒童が自分の着想によつて自己の生活を立體的に表現する所に價値の中心がある。元來兒童の生活は決して平面的なものではなく常に量をもつた立體生活である。日常目擊する萬象が立體的であるとすれば、立體的表現は兒童の生活に最も近似してゐる。

圖畫は立體を平面上に表現するが、手工は立體を立體に表現する。殊に粘土細工は物象そのものゝ立體感を表現する作業が中心となるから、茲に兒童の立體感が修練されてくるのである。

4、手指の感覺の陶冶に適すること

他の多くの手工教材が工具を媒介として材料に接するのに反し、粘土細工は直接に手指を材料に觸れて形體を作つて行くのであるから、手指の感覺器官を陶冶して行く上に獨特の長所をもつてゐるのである。

5、美的情操の陶冶と工業の趣味養成に都合よきこと

粘土細工には二つの方面が對立してゐる。その一は彫塑的方面で、他の一は窯業的方面である。前者は藝術的基礎の上に立つもので、之によつて美的情操の陶冶を行ふ。後者は工業的基礎の上に立つもので、窯業的知識の一般を得させると共に工業の趣味を長ぜしめることが出來る。

斯くの如く粘土細工は多くの優れたる特色を有し、手工教育上重要な位置を占めてゐるのである。

二、粘土細工の仕上とセメント工

文化の進歩と共に市場には日々新しい材料が出てゐる。之等新材料は勿論、塗料或は加工材料としてもよく研究吟味して、とり入れ得るものは出來るだけとり入れ、之によつて創作力と工業常識を高めて行くことは、文化に浴し文化の發展に貢献せしめる國民を造る上に大切な一面である。粘土細工に於ても材料に種々新しいものが出來てゐるが、價格其の他に於て小學校に適したものがないやうである。たゞ仕上の方法と關係した材料としてセメントをとり入れたいと思ふ。

1、粘土細工の仕上について

(1) 素　燒・樂　燒・彩　裝

粘土細工は作り上げた其のまゝでも一通りの價値はもつてゐるのであるが、着色か素燒、出來れば樂燒までして仕上げるのが順序であり、又それによつて始めて實用に適するものとなつて來るのである。彩色材料にはデザインカラー・カゼツクス・エナメル・オーカー等いろ〳〵あつて、うまく仕上げれば水や熱にも耐え美しくもなつて、燒かなくても可なり實用に

なる。

素燒をしたものは極めて堅牢になり、濕氣に遭ひ水に濡れても龜裂崩壞の虞がなくなる。簡單な窯さへあれば素燒は容易に出來るし、小形のものを燒くには焜爐でも十分間に合ふから、せめて素燒まではしたいものである。更に設備と費用に惠まれるならば樂燒までするのに越したことはない。

◇

陶磁器は我が國に古い歴史をもち、その製作の技術的方法も我が國民によく同化せられ、日本藝術としての特色を十分に備へた工藝品であるから、粘土細工の指導と關聯し、美術講話の資料としてその一般を授けるのは極めて意義あるものと信ずる。

その要項は次のやうにしたい。

一、基礎的一般知識について

陶磁器の意義・沿革・製法(原料・工程)種類等

二、各陶磁器について

產地・特色・製品・變遷の大要等

(2) 石膏による仕上

粘土細工の作品は保存に困難なことが缺點である。板物類、薄肉のものは素燒にし更に樂燒にすることも出來るが、厚肉のものはそれも困難である。そこでこの石膏細工を實習するのであるが、之は粘土細工仕上の一方法としてのみでなくそれ自體にも獨自の價値をもつてゐるものである。そして石膏にとつたその儘でも素朴な美しさをもつてゐるものであるが、更にペンキ(黑又は黃)を塗り綠青や胡粉のいぶしをかけるとブロンズ風のや燒物風のなど面白いものが出來る。

然し細工に稍ゝ困難な點があるから低學年に於ては適當の時機に教師がとつてやる事とし、一般には尋六位に於て指導するのがよいと思ふ。石膏の學習に當つては、石膏の性質・型取り法の一般などを授けるのは勿論である。

2、セメント工について

今日はセメントの時代である。我々は心して見るとき、セメントが作り出した新しい構成の實用と美觀とが、現代の都市は勿論農山漁村に至るまで曾てなかつた清冽な風致を隨所に描き出してゐるのに一驚を喫するのである。セメントの使用量は文化の程度を測定する唯一のスケールであると云はれる。我々はセメント時代に生活してゐながら動ゝもするとその用途に對し大建築とか道路・橋梁・發電所のダム等の大工事にのみ目を惹かれて、我々の住む家の土臺や門柱・流し場・湯殿を始め金魚池から植木鉢にまでセメントが普及してゐる事實を見逃してはゐないだらうか。近代生活に不可缺のセメントに對する一般民衆の無知は、小學教育の教材にセメントを無視してゐることに職由してゐるのではなからうか。

我が國にはセメント製造に必要な原料が到る所に散在してゐる爲、その製造工場も早くから設けられ、今日では歐洲諸國に匹敵する高級品が純國產品として盛んに產出せられ、何れの地方でも極めて容易に且安價に得られるやうになつて來た。

此の時に當り、セメント工藝中より簡易なものを選擇して兒童に製作實習させることは極めて大切なことであると思ふ。更にセメント工の特色・材料・種類・工程等の大要を解說して、現代の文化材たるセメント工の一般を理解させることも必要である。

兒童にとつてセメントは非常に喜ばれる材料である。又セメント程施行の簡單なものはない。水で練れば固まる。粘土のやうに自由に製作が出來る。製作したものは堅牢で兒童の生活の伴侶となる。隨つて兒童の思想感情を立體的に表現するに

は極めて好適な材料である。

兒童に製作させてよいセメント工藝は門札・植木鉢・筆立・花活・文鎭等であるが、工夫を加へるならば幾らでもある筈である。セメント工作は動さもすれば表現が單調になり、作業が機械的になりがちであるから、基礎的な工法以外は製作の方法も技巧も自己の內心から生み出させる。又表現材料も日常生活の事象中から廣く見付けて來るやうにする。斯うして自ら目的計畫を立て、實行し批判する。この立體的造形的な作業を自由に遂行して行く學習の過程に、兒童を對象とするセメント工の全的効果が存在するのである。

普通の土木建築は殆ど鐵筋コンクリートである。コンクリートとはセメントと砂と砂利との混合物に水を加へて練り合せたもので、その中に鐵材を埋め込んで兩方の各特徴を共同的に發揮せしめる樣製作したのが鐵筋コンクリートである。製作させることは出來ないが、大きいセメント工は殆ど鐵筋コンクリートであるから、實際の工事場を見た場合など適切な解說を加へることを忘れてはならない。

三、粘土細工指導上の留意點

1、題材の選び方の指導

題材を教師から固定的に與へたのでは模倣的な技巧の練習になつてしまふ。又漠然とした題材では個性をもつた生きた表現は得られない。自己表現と創作を重視する粘土細工に於ては先づ題材の選び方を訓練することが大切である。

題材を自分の生活から選び出すことは既に創作であつて、よい題材はよい表現を生む。僕の弟とか、學校へ來る途中見た犬とか、築港の燈臺とか云ふ風に自分の生活から生きた題材を選ばせるのがよいと思ふ。

2、題目の範圍を廣くとること

全くの自由製作は題材が一方に偏したり製作に行詰つたりし易いから、自由選擇の餘地ある大きな題目を與へて、その中から兒童の生活に即する小題目をとらせるやうにする。例へば自動車とか汽車とか云ふのでなく乘物、犬とか馬とか云ふのでなく獸類とすれば、その中から可なり自由に題目を選ぶことも出來、兒童の活動する分野が多くなつて創造性も多分に現れるのである。小さく題目を極限するよりは題目のとり方そのものを訓練することが大切である。

3、實感の表現を重んずること

物の形を固定的に決めてしまつて概念的に物を作らせたのでは、單に手先を器用にするばかりで心の感激が伴はないから兒童の作品としては味がない。且何等の創作味も現れて來ないのである。ところが自分で題目を選んでその時の感激をそのまゝ表現するやうに導くと創作味のある生々とした作品が出來るのである。大體中以下の學年では記憶によつてその感激を表現させ、高學年では實物を前に置いて寫生的に作らせるのがよいと思ふ。

4、箆に使はれないこと

箆はなくても粘土細工は出來る。粘土細工には附きものゝ如く最初から箆を使はせることは却つて表現を不純にする。だから初步の間はなるべく使はないで、十本の指を生きた箆として十分手先の修練を圖るのがよい。段々と緻密な表現をするやうになつて、どうしても指丈では不足を生じて來た時、始めて箆を使はせる。その箆は各自の必要に應じて竹や針金や洋傘の骨などを用ひて都合のよい形に作らせてもよい。要は箆に使はれないやうに注意し、必要を感ずるまでは與へない。

5、材料を豐富に與へること

少し許りの材料では思ふ存分自己を表現することが出來ない。兒童の欲しいだけ與へてその製作本能を滿足させる。又大

作力作を奬勵して着眼を大きくし學習の意氣を高めてやることも大切である。

6、他教科との連絡を圖ること

他教科との連絡を圖つて綜合的な題材によつて作業させることは、表現範圍を擴げる上にも又學習の能率をあげる上にも忘れてならぬことである。特に圖畫科との連絡は緊密にせねばならぬ。例へば製品に圖案を施したり、製品を寫生したり、いろ〳〵方法が考へられる。

7、其の他留意すべき點を列擧すれば

(1) 手を清潔に、衣服や机も汚し易いから常に「惡戯をする隙を與へない」やうに心掛けること。

(2) 製作後は各自に用具を洗はせ、よく整理をする習慣を作ること。

(3) 色をつけるにはなるべく淡彩にして、彫塑固有の美を損はないこと。

(4) よく物を觀察してその特徴をとらへさせること。

(5) 丈夫に坐りよく、どちらから見ても格好よくすること。

四、粘土細工指導系統案

學年	月	週	題材	指導要項 用具・工法	指導上の注意事項	教授要目
尋一	六	9	きびだんご・團・卵	濕布・粘土板の使用 粘土の丸め方・切り方 一つの塊から頭・手足を引出して作る法	用具及び粘土そのものゝ取扱に慣れさせる 技巧に因はれず興味本位に取扱ふ 作業前の準備	動物
		10	遊んでゐる子供			
		11	家に個ふけもの	粘土の練り方	自由大膽な動的表現・後始末の訓練	
	七	12	お供餅		やゝ技巧的な指導(曲線)上と下との割合	植物
		13	乘物(陸上)		形態の均衡に注意 走つてゐる感じの表現・作業訓練に注意	人物
		14	私の好きなもの		慢然とした取扱をせぬ 作る物・仕事の順序・手法・割合等考へながら	船車等
	九	1	夏休みのこと	大きいものには心棒	一時に多くのものを作らないやう 代表的な簡單なものを製作・作業訓練の徹底	毎週一時
		2	串だんご	竹籤・切篦使用	大きさの等しいものを作ること 串にさす場合・球形を崩さないやう工夫	
		3	お皿に果物	把手の作り方	皿と果物・果物相互の割比に注意	
		4	兎と亀	草・紙等補材混用	山・木・草等加味、境遇的場面の構成	
				補充教材	瑕つなぎ・塗磨・蠟燭・水鳥・果物等	
尋二	六	9	私の好きなもの	各工法の復習	自由な創作的表現に努めさせる	第一學年ニ準シ稍々程度ヲ高メタルモノ
		10	皿(木の葉形)	平板の作り方 厚さ定規・丸棒	洗潔・後始末・準備の訓練 實物・押捺・彎曲細工法	
		11	乘物(水上)	指先(腹)の訓練	出來れば素燒・樂燒する 坐りをよくする爲水面から上を製作して安定感を保たしめる	
	七	12	かち〳〵山	練習的に	童話より思ひついた思想を子供らしく自由に表現させる	
	九	1	運動してゐる人	人體の感情的表現	全身の表情・身振りといふやうな全體の感じや特徴をうまく摑ませる	毎週一時
		2	いろ〳〵な野菜	竹篦使用	各その特徴の表現に努めさせる	
		3	果物	球形に屬する果物の製作	最初球形を作つてから夫々の形を製作させる	
		4	着色	彩裝指導	既成作品中の適當なものを着色仕上げさせる	

	尋	六月	11	私の好きなもの	補充教材
		七月	12	花瓶	薄肉手捻工法 掻篦使用
			13	塔・燈臺	角錐・圓錐の工法
			14	動物園	共同的製作
	三	九月	1	人物	人體の調和的表現
			2	草木の葉	平板上薄肉盛上
			3	貝類	平板上厚肉盛上
			4	すきな建物	自己の計畫による構成
					補充教材
	尋	六月	10	壺	紐作り法
			11	お面	手捻・薄肉仕上
		七月	12	蛙	手捻り法
			13	箱庭	綜合的工法
			14	同	補材使用
お茶道具・友達の顔・兎・獨樂等					
日常の生活中より題材をうまくつかませる 兒童の着眼・思想をそのまゝ表現させる					
花瓶の特徴を研究させる 形・模様の工夫をさせる 丈夫に作つて安定感を保たせる 適當な臺・石垣・石段等を工夫構成させる 分擔作業をしてから綜合仕上げをする 他の材料で環境を工夫させる					
細部の表現よりも全部の姿態に注意 各部の大きさの釣合・安定を保たせる 實感の表現・稍々技巧的に表現させる 出來るだけ實物に近く・高低の加減に注意 各自好みの家を計畫構成させる					
銅像・魚類・好きな人・筆掛					
形狀及び模様を考案させ意匠を練磨する 陶器製作の課程と連絡して指導する なるべく手指で作らせる 喜・怒・哀・樂の情を大膽に表現させる					
蛙をよく觀察させ・興味の中にその生活狀態の要點を作をさせる・理科と連絡 設計圖を描き意匠を凝らして製作させる 補材としてボール紙・木片・竹等を使用させ或は小石・枝葉等の自然物を應用して添景物を配置する					
第二學年ニ準シ稍々程度ヲ高メ更ニ建物模様等ヲ加フ	第三學年ニ準シ稍々程度ヲ高メタルモノ	毎週一時			

	四	九月	1	徽章・メタル	薄肉浮彫（篦の使用）
			2	私の顔	薄肉浮彫（主に手指にて）
			3	同	彩裝指導
			4	自由製作	應用的製作
					補充教材
	尋	七月	12	地圖	紙粘土使用
			13	建築物	積重ね法
			14	胸像	手捻り法
	五	九月	1	同	着色仕上
			2	壺・皿類	手捻・卷作り又は彎曲工法
			3	同	
			4	同	素燒・樂燒又は彩裝による仕上
	男女				補充教材
	尋	七月	13	筆立	セメント細工
			14	同	（丸彫法 塗着法）
	六	九月	1	水入	中空丸彫 樂燒仕上
既有知識を基礎として自己の考案になる徽章・メタルを作らせる 鏡を見て自像を作る 平面的表現にならないやう注意 そのまゝに或は素燒して彩裝を施す 各兒童の意慾により自由に選擇して製作させる、計畫的態度で		毎週二時			
筆立・魚形文鎭・記念碑・動物等					
板上に紙粘土を盛上げて模型地圖を作る 地理科と連絡・地圖の理解 煉瓦式に部分を作つて積み重ね築き上げて 西洋建築物の概念を得させる 自像又は他をモデルとして製作 大體の外形・各部の均衡・筋肉の形狀をよく觀察表現させる ブロンズ風又は燒物風に仕上げる 形狀を正しく且美しく作ることに努めさせる 適宜の彫刻を施して裝飾する 燒き方・釉・燒の方法實習 又は着色して仕上げる・窯業の一般を授ける					
玩具・植木鉢・私の家（學校）等		毎週二時			
型を作つてその中に流し込むか又は小石・貝などを接ぎ重ねて作らせる セメントの取扱法を知らせる		（注意）			
反古紙を丸め粘土で同厚に包んで製作		同前			

（注意）心要ニ應シ粘土細工ヲ加フル事ヲ得

女男	月	4	同	補充教材	花瓶・私の學校・橋梁・植木鉢（セメント）
		3	柱掛け	薄肉浮彫	漫畫の主人公・草花等を平板上に作る
		2	手・足	丸彫	モデルにより手又は足を實物大に作る、精密な寫生作たらしめる
				石膏型取	平型の石膏型又は寒天型錄造法
					毎週二時
高一男	月	1	器物	紐作り又は板作り法	紐と紐との接合を堅く・形の考案に努めさせる、板作りは底の接合に注意
		2	同		理科と連絡（窯業の一般）工藝の話
		3	同	樂燒、彩裝	參考品を用意して製作させる
		4	胸像	丸彫	像告して選擇させ必要な特殊の材料
					毎週一時
	十月	5	同		
		6	同		
		7	同	石膏仕上又は彩裝仕上	エナメル・綠青によるブロンズ風仕上又は寄せ型・毀し型を折裏して石膏に型取る
				補充教材	鄕土の模型・果物・建築物
高女二	六月	10	門札	セメント細工（平彫法・浮彫法）	平板を作り任意の彫刻又は浮彫をさせるセメント工の一般を知らせ、その取扱に慣れさせる
		11	同		像め課題して彫刻材料を選擇させる
	七月	12	浮彫自由製作	薄中肉浮彫	最後の粘土細工だから相當大作力作ならしめる
		13	同		毎週一時
男	月	14	同	石膏仕上	平型石膏型取・彩裝仕上
				補充教材	庭園の區劃・小道の共同製作（セメント）

五、粘土細工の發展的取扱

1、第一學年

1、尋一に於ては先づ粘土細工を好きにさせることが最も大切である。元來低學年の兒童は頗る發動的の傾向を有してゐるもので、捨てゝ置いても何かしら手足を動かして製作しようとするものであるから、その性質を利用し助長さへすれば大した努力をしないでも好きにさせることが出來る。好きになりさへすれば期せずして熱心になるものであるが、この熱心はどこまでも續けさせることが必要で、苦痛を伴ふ努力と云ふやうなことを要求してはならない。どこまでも朗かな氣分で何か遊戯をしてゐるのと同じやうな氣持で仕事をさせることが大切である。

2、題材は兒童の生活から採り、範圍を可なり廣くして自由に選擇が出來るやう考慮しなければならない。命ぜられた課題には感興も生命も乘り難いが、自分の採擇した題材には自己感が深く鋭く含まれて來るのである。

この頃の兒童の作りたがるものは活動的なもので、特に玩具・乘物・動物等の動的な姿態を好むから、それ等に基本的な工作法を練習させるものを加へて指導したい。

3、この頃はまだ手指が十分にきかない時代であるから、努めて大まかな仕事だけを實行させるのがよい。又模倣活動の時代であつて、他の細工に於ては殆ど模倣によらせるのであるが、粘土細工に於ては彼等の工夫考案の力を出來るだけ伸ば

せてやりたい。

4、工作法に拘泥することなく、自由に表現させることを本體とする。然し全然工作法の指導を粗略にして徒らに彼等のなすがまゝに放任することは彼等の表現力を稚拙の域にさまよはせ、その創造力の伸展にも障害を與へることになるから、必要に應じ適當な工作技術の指導を忘れてはならない。大體に於て粘土の練り方・球・丸棒・簡單な立體の表現法など極く初歩の技法と簡易な接合法について授ければよいと思ふ。

5、材料は餘り少くして小形のものを作らせるより、相當大きなものを作らせるのがよい。然し初めからあまり粘土を與へると、衣類や周圍を汚し易いから、初めは適當に與へ、後は必要に應じて與へるやうにする。

6、用具は粘土板と濕布とし、箆はなるべく使用しない。粘土板は濡れてゐると粘土が喰附くからよく乾いたものを用ひ、濕布は子供の力で堅く絞つて一定の場所に置き、手があまり汚れた時拭ふ、粘土の下に敷いてはならないこと等教へる。

7、作業に掛る前にはちやんと準備をしてかゝること、袖口をまくり上げて着物や机を汚さないやう、粘土を丸めて投げ合つたりしないこと等注意を與へて、最初から良き習慣を作ることに心掛ける。然し此の頃の兒童の日常生活はすべて自己の興味によつてのみ行動してゐるのであるから、無理に強ひたりしては却つてよくない結果を招くものである。どこまでも兒童の自然的な本能的な活動と興味本位に行動する、それに即して自然的に訓練づけることが大切である。又この時代の兒童はたゞ概念的に知つてゐるまゝを表現するのであつて、大したことは望めないが、自分で工夫することの面白味を朧氣にでも感じさせてやりたい。

8、批評鑑賞については、理論や批判を試みるよりも、鑑賞的方面に浸らせて、好き嫌ひを感じたり、綺麗さ醜さを僅かに感ずる程度に指導したい。

2、第二學年

1、尋二に於ては前學年に引續き手工を好きにさせることに基礎を置き、漸次心身の發達につれて指導の歩を進めて行かなければならない。その第一は想の指導である。仕事が少し難しくとも工作法が變則であつても、兒童にやつて見ようと云ふ熱望と熱があるならやらせて見る。技巧よりも着想に重きを置くことが大切である。併し何時も失敗と變則を繰返してゐては却つて興味を減殺してしまふから、常に程度の調節をして行かなければならない。

2、題材は兒童の生活中に求め、可なり廣い範圍の課題を與へてその中から自由に選擇させる。兒童の發表慾を旺盛にし常に兒童を發動的の地位に置くやうに指導して、彼等が自分の生活の中から無限に題材を選んで、勇敢にそれを表現しようと試みることに力めさせたい。この頃の兒童の好む題材はやはり動くもの若くは彼等の生活に關係の深いものであるから、さうした點に留意して課題したい。

3、尋一と同樣、模倣的に大いに活動する時代であるが、自分で工夫するのはよいものであると云ふことを知らせて、自分が工夫することに若干の興味を感ずるやうに導き、彼等の持つ構成能力の萠芽を養つてやりたい。

4、諸種の工作樣式を知らせたり技巧を習得させたりすることは、この程度の兒童にはさう多くを望む必要はないけれども、之を適度に與へることをしなかつたならば、如何によい想を持つてゐても、それを思ふ通りに表現することが出來ない。工作樣式や技巧は表現の武器として、必要に應ずるに足る最少限度は授けなければならない。而して一つの工作法を授けたならば、それを應用させ練習させることが大切である。即ち一つの基礎教材の次には應用教材を課す必要がある。大體尋二に於ては前學年に連絡して粘土の丸め方、簡單なる接合法、平板の作り方など基礎的技術の練習をさせたいのである。

5、なるべく材料の混用を許すがよい。それが多くの場合自然であり、より自由な表現が出來るのである。竹鍼・針金などは粘土細工に於て常に兒童の要求するものである。たゞ兒童は時に變則的な材料の混用をするから、之は經驗を積むに從つて徐々に正則な方法に導いてやらねばならぬ。

6、用具については粘土板と濕布の使用に慣れさせると共に、新しく竹箆を使用させその用法を教へる。然し必要な場合のみに限つて使用させ、他はすべて手指によらせること。

7、まだ微細な筋肉の働かない時であるから細かな表現は出來ないが、徐々に手指の感覺の陶冶も圖るべきである。作業訓練については大體尋一に續けて實行させ、その徹底を圖る。勤勞の習慣も實行力の養成もまだこの學年では難しい。注意力は散漫であり、ある時間持續的に仕事をさせることも困難である。そこで興味ある問題に直面させて、そこで實行させると云ふ態度で導いて行けばよいと思ふ。

8、批判の要點を授けてそれについて考へながら批判させ、靜かに見せてその美を味はせる程度の鑑賞指導を行ふ。

3、第三學年

1、尋三は一・二年の低學年を過ぎ、四學年と共に中堅であるから、五・六年に對する連絡上、基礎となるべき見地を以てすべての事に當りたい。

2、題材は努めて大きくとつて、構成創造の內容を兒童の生活から廣くとり得るやうに訓練する。兒童によつては同じものばかりを作つてゐる者もあるから、その手工生活を發展させるやう啓發の道を講じなければならない。要目には「――更ニ建物・模樣等ヲ加フ」とあるから、さうした題材を加へて、立體構成能力の練磨と美的情操の陶冶を圖ることが大切である。表現の形式も低學年に於てはたゞ概念的に知つてゐるまゝを表現してゐたが、この頃になると實感的に感じたまゝを作るやうになる。即ち自分の目擊した直觀が中心となつて、鋭い印象、鋭い感激が作品の中へ織り込まれて來る。かうした兒童の自然的な自發的生活を尊重して、之を一層指導し發展させて行く所に手工教育の重要な一面がある。その爲にはいろ〳〵な材料や各種の製品・圖面など多く備へて、物質的環境を豊富にして置くことが大切である。又學校附近の自然的環境を大いに活用して、自然の大教場で學習させることも一つの方法である。

3、この頃から次第に創造することも旺盛になり、創造の喜びを會得するやうになるから、創造によつて得た喜びを更に深い創造に導くことに努力したい。

4、工作法に於ては花瓶や建物などの作り方を教へる外新しいものはないから、力めて手指の感覺の陶冶を圖るべきである。即ち手で粘土を握つてその硬軟・大きさを感じ、指頭で粘土を扱ふことによつて直接に形を認識する修練をさせるのである。時に共同製作をさせて、協同的精神の涵養に努めることも大切である。作品は適當な時期に着色させる。色があくどくなつて彫塑の美を損はないやう、なるべく淡彩を施すのがよい。

5、粘土は十分に用意して兒童の欲しいだけ與へる。尙副貳的材料として着色の用具と材料、小石・マッチの軸木・砂・針金・竹籤・紙等を用意し、一層創作性を發揮させること。

6、用具については二年と同樣、粘土板と濕布の使用に慣れさせ、必要に應じ竹箆を使用させてその用法を知らせたい。

7、この學年に於てもやはり興味本位に進むことが大切である。たゞ此の頃から一つのものゝ完成に大きな喜びを感ずるやうになるから、努力の結果の完成に對して大いに賞讃し、又兒童にも本當に自分がなし遂げたといふ喜びを味はしめるやうに導いて、その喜びによつて、次々と勤勞的な立場にあつて仕事を進めて行くやうにさせることが大切である。

8、自分が作つたものを批判し鑑賞する頭腦は更に進められなくてはならない。單に自己の作品に對する許りでなく、より

優れた作品を比較鑑賞させることによつてその能力を陶冶しなければならない。

4、第四學年

1、この頃になると單なる興味に支配される事なく、目的のために結果の爲に努力を拂ふやうになつて來る。彼等が何か製作する時の努力は涙ぐましい程である。その代りそれを仕上げた時の喜びは非常なものである。目的を遂行し、良結果を得ることを豫想して、喜んで生活するまでに彼等の生活は進展して來てゐる。隨つて本學年の指導は、之を基調として行はなければならない。

2、題材については前學年同樣・彼等の生活の中から實感的題材を選ばせ、自己の直感を大膽に純眞に赤裸々に立體化するやう進ませたい。かうした題材の發展で兒童は自己を立體的に自由に面白く表現して行くのである。

3、この時代は模倣と創造とが相なかばして行はれる時であるが、低學年から自分で工夫し出すことに喜びを感じさせつゝ學習を進めて來れば、この頃に於ては全く模倣的に作ることには餘り興味を感じなくなるものである。更に工夫力は工作法の習得に連れて進むものであるから、必要な工作法を授けてその修練を圖ることが大切である。

4、大體四年に於て授くべき工作法は紐作り法、浮彫等であるが、併せて既習工作法の習熟をはからなければならない。

5、材料は粘土の外適當な補材を混用させること。時に多くの粘土を與へて大作・力作をさせることも大切である。その爲には十分に計畫を樹て案を練り、必要な材料は自分で調へるやうに仕向ける。

6、箆は手の延長としてどうしても手では不十分な點のみに使用させる。竹・木・針金などを補材として使用する關係上、金槌・鋸・ペンチ等の使ひ方も必要に應じて簡單に教へるのがよいと思ふ。

7、尋一から尋三までは兒童の興味本位の生活に即して指導するので、作業訓練については十分な事が出來なかつたが、この學年からは相當徹底した訓練をつけなければならない。それには兒童の生活が次第に努力的に自律的になつて來るから、作業訓練をそれに織り込んで、自覺的に慣れさせることが大切である。作業前には自分でちやんと準備をすること、作業中は自分で工夫しながら熱心に製作すること、用具などの後始末をきつぱりすること等の習慣をつけて行きたいと思ふ。

8、出來るだけ鑑賞の機會を多くして、更に進んだ程度の鑑賞指導をしなければならない。殊に多くの作品には美的要素が含まれて居り、又今後の作品には大いに含まれなければならないから、美に對する鑑賞力の陶冶にこの頃から心掛けて行きたいのである。

5、第五・六學年

1、要目によれば尋五以上には粘土細工が見えてゐないが、その注意の第二項に「必要ニ應ジ第五學年以上ニ於テモ粘土細工ヲ加フルコトヲ得」とあるので、引續き指導したいのである。蓋し粘土細工のもつ教育價値は極めて高いものであり、その表現の方法と程度を高めるならば、高學年の兒童に課して無理ではないのである。たゞ低學年に於ては粘土が最重要な材料であつたが、高學年に於ては竹・木・金工が主となり、粘土は副貳的材料となることは勿論で本末を誤つてはならないのである。

2、要目に「簡易ナル日用品」とあるが、之は大人の生活に要する日常の實用品と云ふ意味ではなく、兒童の日常生活に必要なものと解すべきだと思ふ。從つて粘土細工の題材もさうしたものを選び、彩裝するなり、燒くなり、石膏にとるなりして實用に供さしめるのがよい。自分の作つたもので机邊を飾ることは非常に嬉しいことで、斯うした事によつて我々の生活は潤化されるのである。

3、過去に於て創造に喜びを感ずるやうに導いて來れば、この時代に於ては模倣よりも創造を好むことは勿論である。然も動的な創作、立體的構成の創造を好むやうになるから、他の竹・木・金屬等に併せて、さうした方面の創造に力めさせることが大切である。

4、この頃になると手指の修練が餘程出來てゐるし、又兒童の日用品を作らせるのであるから相當精細な美的な表現をさせるのがよい。燒物にするものは接合の仕方に十分氣をつけさせなければならない。又實物を寫生するものは出來るだけ精密に實物に近いものを作ることに心掛ける。

5、粘土の扱ひ方には十分慣れさせ、製作物による粘土の硬軟の度合なども自分で加減させる。六年に於ては新しくセメントを使用するからその性質・用途など知らせ、用法に慣れさせることが必要である。又作品を石膏にとる場合にはその要領の一般と石膏の性質を知らせ、石膏細工のもつ素純な美を味はしむべきである。

6、精細な表現をさせるから篦を使用する。特別なものは自分で工夫して作らせるやうにしたい。石膏の型取其の他に粘土以外の材料を使用するから、竹・木・金工と連絡して各種工具の使用に慣れさせることは云ふまでもない。

7、五・六年と云つてもまだ子供であるから、勤勞の習慣を養ふとしても兒童の喜ぶやうな教材と方法で取扱ひ、自然的に習慣づけるのがよい。努力の完成に對しては前學年以上に興味を湧かすやうになる。この努力の結果に對する喜びをはつきりさせて行くことは次々と努力して行く上に大きな意味を持つのである。作業の訓練については前學年の方針に從ひ、更にその徹底を圖り自律的な作業が出來るやうにしたい。

8、從來より以上に美の鑑賞力に目覺めて來る時代である。更にそれを進め得るやうな施設・方法を講じて益々助長させて行くやうに努めなければならない。

6、高等科第一・二學年

1、高等科に於ては手工科が必須科に加へられてゐるが、設備其の他の原因で餘り實績が擧つてゐないやうである。高等科は尋常科と違つて兒童の諸能力も進んで居り、又他日實業につく者が多いから、尋常科に於ける方針を踏襲しその擴充を圖るは勿論、餘程までに職業的、實用的陶冶を盛り込まなければならない。要目には示されてゐないけれども粘土細工は前學年同樣の理由を以て手工科にとり入れたい。特に設備に缺けてゐる學校に於て粘土細工を課すならば、特別な教室や大した用具がなくとも相當な效果をあげることが出來ると思ふ。

2、題材は兒童の日常生活に必要な器物或は胸像・レリーフ等相當努力を要するものを作らせて、物品製作能の陶冶を圖ると共に彼等の机邊を飾らせたい。

3、高等科に於ては用具の使用にも材料の處理にも習熟するし、一方に於ては生理的に身體の發達が進み、一般的の智能が發達して來る爲に、創作にはすべての條件が揃つて來るから、具體的な創造活動に大いに力を入れ得る時代である。その爲には創作のヒントとなるべき參考資料を多く準備する事が必要であり、又兒童自身にもさうした資料を見出させることが大切である。

4—6、高等科に於てはどうしても木・金工に主力を注がなければならないから粘土細工の工作法・材料・用具については大體前學年と同樣の方針で、たゞ多少進んだ程度に取扱へばよいと思ふ。

7、尋常科に於けると同樣高等科に於ても興味ある學習をなさしめることは固より大切であるが、更に身體的な勞働によつて心も身もそこに快感を感ずるものであることを、實際の體驗を通して感得させることに努めなければならない。作業の準備・計畫・整理等すべて自分で行ふことに力めたい

8、兒童はだん〳〵成長するに從つて、本當の美と云ふものに目覺めて來はじめるから、製作又は製圖させると共に優れた之作品に觸れさせることが大切である。特に過去及び現代の名工の物したる作品を鑑賞することにより、そこに現れた我が美術・工藝の特徴、日本趣味なるものを味得させたい。

結び

土を愛する心は、我が鄉土を愛し、我が國土を愛する心である。

土の作品に注ぐ愛着は、その作品の持つ素朴な根強い美を求める心である。

土に對する純眞な愛着とその作品の持つ素朴な美を求める心とは、粘土細工の根柢となるものである。

※

日本精神の定義は私にはわからない。私に理解出來るのは日本の歴史と地理的環境とそれによつて養はれて來た國民的性格といふものでしかない。隨つて日本精神と手工教育との關係もわからないが、強ひて結びつけるのは無理だと思ふ。

時代と云ふものは大きい。いくらじたばたしたつて直ぐにどうなるものではない。と云つて、何時までもおとなしくしてゐる事によつて決して世の中は早くは良くならないが、少くとも教育のことは、やたらに譯もないことに躍らされて上調子の行動を起すべきではない。

日本の教育には、いつの時代が來ても變らぬ眞の日本人教育の使命がある筈だ。

※

粘土細工はその材料・手法に於て、豊かな鄉土色を持ち、日本人的な表現形式をもつてゐる。又その作品には日本的な趣味が最もよく現はされてゐる。隨つて粘土細工によつて日本人的な能力を陶冶し、日本的な趣味を養成することが出來る。

之が日本精神を取入れたことになるかも知れないが、斯うしたことは手工科本來の使命から考へて當然行はれなければならない筈のもので、事新しく論ずる必要はないと思ふ。

しかし手工教育に日本精神が強調されると云ふことは、現在の手工教育が邪道に趨り、當然行はるべき筈のものが行はれてゐないと云ふことの證左にもなるのだ。といふことも言へる。

要するに・手工教育本來の使命は、筋肉作業を通して知・情・意の圓滿なる陶冶を圖り、日本國民としての人格完成を目指す所にある。手工科の一分野たる粘土細工の本領も亦茲にあらねばならぬ。

備考

發展的取扱の番號は次の意味である。

1、指導の根本方針
2、題材について
3、工夫・創造について
4、工作法について
5、材料について
6、工具について
7、作業訓練について
8、批評・鑑賞について

生活合理化の家事教育

訓導　多田こよ

目次

一、家の起源
二、家庭と國家
三、家族制度の特質
四、家庭生活の現狀
五、家庭生活と家事科
六、指導の要點

家の生活は之を社會的に見ますと、最も原始的なものでありまして「人群」の生活に次いで發達したやうでございます。原始的な家の生活では、生産も消費も教育も悉く家の中で行はれたのでございまして、家は工場であり、學校であり、研究所でありました。ですから此の時代の人類生活は總て素朴で、單純で、總體的に行はれてゐたと見ることが出來ます。其の後人類の進歩に伴つて國家社會組織となり、學術・教育・藝術其の他として分離し、各々の專門家を出す時代となりまして、人々が各部門的陶冶を經た後の家の生活は、決して原始時代の家の樣に素朴なものではなくて向上發達し、其の上、人々の體驗を通して、再び綜合組織せられたものであります。ですから換言しますと、家は文化の綜合生活を營む場所であります。又社會的に之を見ますと家は單純な團體生活と見られて居ますが、其の生活の內容は前述の樣に文化の綜合生活でありまして誠に多樣であり、又其の機能としましても個人の種族の存續・養育・生産・經濟・道德・藝術・宗教等多種であります。現在の人類生活は國家組織の下にあつて、其の强固な保護と保證を受けなければ寸時も生活の安定を得られないのであります。この有り難い保護をうけてゐる私達は個人を超越して國家的・歷史的に盡す樣活動しなければなりません。即ち愛國心の基礎の上に文化價値創造の努力をしなければなりません。愛國心は延長すると國際精神ともなり、平和精神をも培養することが出來ます。又之を縮少しますと愛鄕心となり、愛家心ともなります。ウエルス氏は「愛國心は之を延長すれば國際精神となり、之を縮少すれば愛家心となるところの人道である。」といつてゐます。ところが世の中には往々にして一國を無視して一家を說き、一國を捨てゝ國際愛ばかりを高調する者がありますのは、謬見の甚だしいものだと云はねばなりません。一國の下に一家があり、一國あつて初めて國際精神も表はれる筈のものであるからであります。

これに依つて考へて見ますと、家事教育は國民生活・國民精神の基礎の上に立つ文化財をもつて家庭生活の指導をしなければならない事は明らかであります。家事教育は單に家庭生活上の個人的利便による內容を備へてゐるだけで足れりとせず、之を國民生活の立場から考慮して、國家精神・國民意識を培養するに足る內容を持たさなければなりません。即ち自己の生活の安易に目的をおく個人主義の立場から脫して國民として社會・鄕土の一人としての務が大切であります。此の見地から考へますと、家事教育は國民精神の養成上にも重大な關係を有つ教科で、個人とし、家族とし、國民としての全人生活の完成を直接の目標として導かなければなりません。

我が大和民族の營爲して來つた國民生活と家族生活とは、互に密接に連結して居ることは建國の精神・國體の精華・君臣の情義・家族制の美點等によつて、明らかに證せられてゐますが、之を國民生活と家族生活について申しますならば、上は

陛下を家長とした一大家族制度の下に個々の家族が從屬してゐるのでありまして、忠孝一本の精神に基礎を置き、君に仕ふる心を以て親に仕ふるを孝と稱し、親に仕ふる心を以て君に仕ふるを忠と稱してゐるのでございます。「義は君臣なれども情は父子の如し」と仰せられ、畏れ多くも君は私達臣民を赤子とみそなはせ給ひ、私達臣民も君を國父陛下・國母陛下と仰ぎ奉り、臣子の道として絶對的に服從して來たのであります。

國は家を大きくしたものでありますから、家が治まる事は國が治まる事といふ解釋を以て、家族制度を理想としてゐます。

家族制度の特質は何であるかと申しますと、云ふ迄もなく家族制度は個人と社會との中間に「家」といふものを以て社會組織の單位として認める制度であり、祖先崇拜を基本とした家を以て組織したところの社會を云ふのであります。即ち家族の構成、形式及び機能樣式を一つの社會の制度として觀る場合には、其の形式は家族制度であります。簡單に申しますと、大きな社會の構成と機能とを維持するために組立てられた家庭生活が即ち家族制度であります。

尙家族制度の性質について考察しますと、この家庭生活は社會を構成する單位となり、家系・家名・家憲が尊重せられると共に、家長權、家督相續、緣組等の特異な制度が設けられてあるのであります。尙一家は戸主の家長が統率、代表し、家長は家系を繼承し、家產を保存し、子孫を敎養し、祖先の祭祀を絶たないのを以て最大の義務とし、各家族は家のために働き、家を中心として生活してゐます。この樣に其の家庭生活は家族全體を本位とすると共に、單に現在の家族ばかりでなく遠く祖先に遡り、子孫に及ぶ祖孫一體の永久存續の團體であります。

要するに家族制度では「家」といふ觀念が制度の生命で「家」は永久不滅に祖先の靈に護られ、一家の者は榮譽を共にし相扶け相勵まして家業に努め、飽くまで其の共同生活の基礎を固くし、家の名と榮と德と財とを子孫に傳へようとするのであります。このやうに本然の家族制度は戸主の獨裁專制でなくて、家族全體のための永遠性のある統合生活體でなければなりません。

我國の家庭生活の沿革は大體以上の樣でありますが、特に其の特徵として注意しなければならないことは、祖先を尊ぶことがやがて皇祖を崇める所以であり、子孫の繁榮を圖ることが即ち國家興隆の基礎を培ふものであると確信せられて居る事實で、我が國の家族制度と國家・皇室との間には斷つことの出來ない深い關係を理解することが出來ます。

然しながら明治維新に伴ふ經濟組織・社會制度の變革と個人主義・改造主義・ロマンティシズム等の思想の發達は、社會制度の單位を漸時「家」から「個人」に推移させ、家長は戸長權及び家產を消失する者が多くなつて、家長は家族全員の扶養力を失ひ、從來の封建的な家族制度は家族相互の人格の自由を尊重する個人主義的色彩を帶びるやうになつたのであります。即ち現在の個人主義的近代家族で、其の經濟生活樣態は、生產消費の自給自足から一轉した消費專門の經濟生活であります。

現時の家庭生活は過渡時代であります。都市生活の家庭は近代的家族の夫婦中心の新家族であり、農村生活者の家庭は尙家長的家族の性質を有つてゐます。ところが現代の社會を風靡する思想は個人主義・改造主義で封建的な家長權を認めず、經濟組織は自給自足の農業本位の生活から、生活上のあらゆる物質を購入する所の消費專門の樣式となりつゝあります。

社會生活の進步に伴ふ商工業の發達につれ都市生活者の激增、人格尊重等の思想の影響を受けて、從來の大家族制度が解體して夫婦親子を中心とする小家族に傾き、同時に家長の法律上の權限と公の意義とは著しく狹められて來ました。

私達日本人の生活は個人として、又一家族としての孤立的狀態では、到底その安定と向上とを企圖することは出來ません。必ず上は陛下の稜威による國家の保護、下は國民の協力に俟たねば成り立たないのであります。

ところが現在は前述の様に時代的影響ばかりでなく、單なる「我」の爲この歴史ある家族制度も外國の思想にかぶれたものによつて破壞されようとしてゐるのは殘念な事であります。私達の尊敬してゐる祖先が歩んだ道で、祖先が殘したこの美風は私達が受嗣いでその道を辿り責任をもつて子孫に傳へなければならない義務があります。明治・大正・を經て昭和の御代に及んだ今日歐米の科學的知識にばかりとらはれることなく、その長所をとり古來の美風を益々生かして行かなければなりません。之を尙一層深く考へますと、日本の家庭は自分といふものを中心とせず己を捨てゝ家の爲、國の爲に努力する。即ち理窟を抜きにし自覺して家の爲に盡す尊い精神的な努力がなければなりません。理知に偏した歐米人には忠も孝も分らないでせう。かういふ人々から見ると日本婦人の我を捨てゝ家の爲、家族の爲に盡す美しい犧牲的精神等は、不思議に思ふのも無理もない事であります。家庭には老人も子供も住つてゐます。老人はその家の習慣所謂家風を傳へるに最も適した人で、多くの體驗者として家にとつては大切な人であります。

一家庭に老若男女が圓滿に生活して行くには先づ若い者が老人を敬ひ何事によらず相談をしてから取りきめるようにし、老人は又我を通さうと強ひることなく、全家族の意識的な協同精神と人格の相互尊重の基礎の上に立つて互に信じ合つて、自己の「分」を知ることが大切であります。かうすることに依つて溫いうるほひのある家庭となります。家庭を樂園と云ひ、慰安所と稱したのもこの美しい民族的精神の流れに浸り日本々來の家庭の圓滿を指したのであらうと思ひます。

かういふ點を省みますと、現在我國は家事教育の徹底に俟つものが多いと思ひます。ところが家事科の眞の價値を國民全體が認めてゐるでせうか。能率增進の聲の喧しく叫ばれてゐる今日の世の中に、ひとり忘れられてゐるのは家庭内の仕事、女子の務であらうと思ひます。家事科は女子教科として重要視しなければなりません。

そこで家事教育は其の教材内容に於て、我國民生活の目標は家族制度を中心に說き進める事を第一とし、家庭の向上發展に資する教材は素より、國家的な材料も先づ個々の家から整へて行かなければなりません。このところを教授の出發點として學習指導をしなければなりません。即ち良い住宅を經營して正しく之に住むのも、良い衣服を選定調製して、正しく之を用ひ、適當に之を整理・保存するのも、或は食物を選定して合理的に之を攝食するのも皆「善良なる國民生活」を營み、同胞と共に共榮の幸福を享受する爲のものでなければなりません。換言しますと、有らゆる家事教材を通じて「善良なる國民生活」を以て、之を統一しなければなりません。

この複雜な家の生活の陶冶を目ざす家事科は當然生活の綜合的な鍛錬でなければなりません。家事科は綜合的教科であるとと云ふ事を耳にしますが之はその教科内容が、物理・化學・動物・植物・生理・衛生・經濟學等各般の知識を採り入れてゐることを意味してゐる故であります。併しそれ等の教科目に屬する内容の中、特に家庭生活に關係あることを寄せ集めたからといつて綜合教科と云ふ事は出來ません。家事科が綜合教科であると云ふ言葉は正しいのですが、その意味は、生活そのものが綜合的でありまして、行爲と分離した知識や信と分離した道は、生活には存在しないと言ふのでなければなりません。

單に概念的知識理論を取扱ふだけに止まるのでしたら、他の教科目にでもその内容をある點迄考慮しますと、出來得るのであります。綜合教科としての家事科は、文化の綜合生活である筈の家の生活事實の上に根據がなければなりません。家の生活の中には合理的な點も非合理的な點も或は衛生的事實も不衛生的事實も、又經濟的な事も不經濟的な事も混淆して行はれてゐますが、家事教授では實際に臨んで、之を如何に合理的に衛生的に經濟的に趣味的に價値化して行くかの陶冶をしなければなりません。此の點から云ひますと、家事科は何よりも各家庭の實情に即し、鄕土的地方的事情に基いて、其の生活の多方的指導が必要であります。隨つて家事科の學習は高遠な學理・法則又は理想的生活の理論を押しつけるよりは、寧ろ兒童の家庭で現在行はれてゐる事實から出發し、この事實を價値的なものとする知識・才能・技術の陶冶をしなければなり

ません。

而も家の生活では、それ等の問題の概念的遊戯、理論的闘爭ではなくて、總べて實踐であります。

隨つて經濟についても、保健についても、教育についても、其の他總べてに當つて、先づ眼前に起つた現實の問題を適當に處理して行く力が必要であります。ですからそれ等に處する豊富な知識・技能を持ち且つ之に十分に習熟させなければなりません。これが家事科に實習・實演が特に重要視されるわけであります。併し實際的修練で特に考慮しなければならないのは、實際的現實的な事象は、唯一回限り起るもので、それと全然同一な條件をもつた問題は再び繰返されることは絶對にないのであります。同じ様な事項でも、どれかの條件が異り一度過ぎ去つた事象が更に起る事はありません。即ち事實は特殊的な存在でありまして普遍性を持ちません。

私達は最も具體的な實習を通じて、普遍的な理論に向はなければなりません。即ち理論の實際化でなく實際の理論化をしなければなりません。さうして此の理論によつて、他の幾多の事實又は問題を處理し得る鍛錬が必要であります。

生活は事實の問題でありますから、總べて實際上の諸事情からの制限を受けますが、併し如何な人でも今日の生活を最高終局とするものはありません。必ず明日の生活を考慮してゐます。即ちより豊かな、より善き生活を念願し、生活の向上に力めないものはありません。だが、より豊かな生活と云ひ、より善き生活と云つても、人々によつて其の意味する所は各々異つてゐます。即ちこれは皆現在の生活ではなく、實現しようと目ざす所のもので、換言しますと課題であります。此の課題を如何に持つかに依つて、人生を有意義にもし又無意義にもしますっ

綜合的に生活の事實を取扱ふ家事科では、その指導に當るものが、人生に對して透徹した洞察力を具へ、價値的生活のどんなものであるかを十分に了解するのは勿論、文化に對して正しい理解をもち、以て事實を統制し得る様にしなければならないと思ひます。

指導者がこの自覺した熱意のある態度でもつて學習陶冶にあたりますと必ず覺醒させることが出來るでありませう。

事實、私達の生活では、實際化することが必要であります。例へば家事經濟で申しますならば、一定の收入を如何に適當に仕別けして消費するかと云ふ事は必要でありますが、更に重要なことは、限りある私達の收入を如何に有効に活用して、人生を有意義にするかといふ問題であります。事實としての生活は如何に食物を調理し、如何に衣類を洗濯し、如何に病人の看病をするか等の問題を決して閑却することは出來ませんが、併し單なる調理・洗濯・看病等そのものが、直ちに人生ではあり得ないのであります。これは全く課題としての人生を解決する爲の單なる一つの方法に過ぎません。方法は課題の見地から統制、使役されるものでありまして、方法の世界に固執する人生は沈滞します。

近頃人々の自覺によつて人間生活に、正しい意義を見出し、價値ある人生の爲に、他の總てのものを材料として使驅して行かうとしてゐます。そこで婦人も亦自覺し來つたのであります。

此の時に當つて私達家庭を掌る者はどう云ふ覺悟がいるか・どう立直して行けばよいかと云ふことに就いて、考へて見ることが大切であります。そして實生活に必要な理由を辨へて有意義に家庭生活を營むことが急務であります。

元來教育は知識を詰込むだけの作用ではありません。兒童に經驗を得させ、その經驗を反省させて行かなければなりません。知識を與へるとしても、その知識を經驗によつて判斷し、確實にしなければならないと思ひます。

さうして更に教育の方法原理を兒童の生活に求める時、兒童の經驗を重視しなければならないと思ひます。經驗のないところに知識を詰込んでもそれは切れ切れの知識・生氣のない知識で、實際の用務を果し得ないと思ひます。私は必ずしも知識を排擊するのではありません。寧ろ學校教育では知識教育を大いに期待するものでありますが、それは實際的な所謂役立

つ知識に育てるものでなくてはならないと思ひます。そして十分理解と思考とが練られて實踐に迄導いて行きたいものだと思ひます。

以上の見地から過去の家事教育を省みますに、家庭と社會との間に介在して高く障壁を築いてゐました。例へば多くの知識を詰込まうとして食品の分析表とか、カロリーの計算表を暗記させたり理論と實習とが結びつかなかつたりしてゐました。又經濟の教授について考へて見ましても、單なる家事經濟學で片付けてゐました。これでは成程經濟學の教授は出來てゐますが、經濟生活の指導が出來てゐなかつたのであらうと思ひます。それですから學校を卒へたものが家庭に入りますと、殆ど役にも立たず、直ちに學習事項をその儘繰り返して失敗した例がよくあります。習つた收入、支出の話や豫算生活の話は生活の實際とは別の存在であるものが多かつた樣であります。

かういふところに家庭と學校と社會とを貫く一體の生活教育等はあり得よう筈がありません。その教授事項がどんな關係にあらうとも、授けさへすればよいと云ふ考ではなかつたでせうか。

次に現在の家事教育を省みますに家事の知識が實際に如何程生きて居るか家庭の有樣を見ると誠に心細い狀態であります。科學的知識の無い者は家庭生活が形式內容共に社會の進歩發展に伴つて變化してゐるに拘らず、何等進歩のない方法で一切を處理してゐますので、有形無形の不經濟が中々多い樣であります。新聞に雜誌に毎日の樣に新しい原理を發表してゐますが、之を實際に取り入れようとはせず、讀んだ記事はその儘片付けて居ます。之では多忙な主婦の頭にどれ位殘るか、先づ實行に移る場合は無いと言つてよいでありませう。

又家事科を學習した者は修めない者に比して如何程その知識が實際に活用されてゐるかこれ又疑はしいのであります。學んだ知識はその儘ノートに仕舞ひ込まれ實際の場合に役立たないのではないでせうか。料理の方法・食品の成分・榮養價についても相當の知識を持つてゐる筈であります。料理の技術の巧拙は見ても分り味つても分りますが、出來上つた料理に含まれて居る成分の損失等は技術の樣なわけには行きません。見た所も分らないし、味つても容易に分るものではありません。爲に平氣で不合理な事をしてゐることが相當あります。例へばヴイタミンは水溶性である事は知識としては知つて居乍ら之を含む野菜を調理する場合長時間水に浸しておいたり或は煮沸が過ぎたりすることがあります。この場合ヴイタミンは如何程破壞されたかは出來上つた物を見ても味つても分らないし、その證據も明らかでありません。此の證據として結果が明らかでない事が私達の日常生活に目に見えないで、どれ程損をしてゐるか、量り知る事が出來ない位あります。之は要するに知識は有つて居乍ら形に表はれ難い爲に實際の場合に役立つてゐないのであります。知識は知識、實際は實際と別物の樣に考へてゐました。此の有樣ではたとへ豐富に知識を持つてゐましても之を持たない者と何等異る所がありません。そこで新しい科學的知識を基礎に我が祖先の歩んだ道、先輩の經驗を重んじて家庭內の諸事を處理して行かなければなりません。この先輩の尊い經驗を採用しない爲、家庭の破壞を來し、意見の相違から家族の者が常に不和に暮すことがあります。即ち家事教材中の養老・敬老の課を徹底きせる上からも是非、老人の意見はその長所をとらねばなりません。

次に家事教材中、國民生活の觀點に立つて家庭經濟から國家經濟に影響する實例を擧げて見ますと、

人口食量問題であります。米は主食品として我國民が古來愛好して來た無二の食品であります。米位私達の健康に貢獻寄與してゐる食品はありませんが、人口增加の割合に米の產出高は增加しないので、自給自足を爲し得ない樣になつて來ました。その對策として移民政策とか稻作增收法とか工業立國政策とか種々ありますが、家庭の主婦の心掛次第で餘程緩和されるものもあります。即ち胚芽米を常用とし、なるべく廢米しない樣、殘飯の利用等であります。尙、米の用途を制限しなければなりません。例へば衣類の仕上げに用ひる糊等は他の小麥とか馬鈴薯・玉蜀黍等の澱粉を使用して十分間に合ひます。

又主食物に雜穀を併用して行く習慣を養成することが必要であります。高一教科書二十一課「米と米飯の」ところを取扱ふ際に以上の事柄を心得として理解させると一層徹底するでありませう。

次に衣服經濟で衣服の種類を減少し、買溜を廢し、堅牢なものを用ひる樣にし衞生上・容儀上から見て不合理にならぬ樣心得ることが大切であります。其の他照明・燃料等主婦の手によつて消費されるものを節約利用する習慣と心得を養はなければなりません。かうして無駄を省いて得た剩餘を貯蓄して行くのであります。これ等の點について家事教授は實績を擧げる樣努めなければなりません。

以上は國家的問題ではありますが、個々の家庭で私達の努力をしなければならない問題でございますから、將來を擔ふ兒童に其の精神を培養しなければなりません。

次に家事科教授に當つての實行方案を擧げますと、

一、系統案の作成

教科書は國家の意志を盛つたものでありまして、唯一無二の寶典でございますが、地方の氣候・風土・習慣に順應して行かなければ價値のないものでございますから、唯教科書の畫一教授だけでは充實を期することは困難であります。ですから、其の地方に適した經營方案を小學校令の示すところによつて立案して、實行して行かなければなりません。

二、理科との連絡

申す迄もなく家事科は應用科學でありますから、理科の知識を離れては成立しないものが多いのであります。家事科は理科で得た知識を實證することによつて、はじめて價値を見出すのでありますから、出來る限り兩科の內容の實質的連絡を圖り一層の努力を以て科學研究に精進し、その取扱ひを合理的にしなければなりません。

三、教材の鄕土化

教材の鄕土化、教授細目は家事科經營の具體的方案でありますからそこに表はすところの教材には鄕土色がなければなりません。例へば教科書に「白木綿の漂白とありましても、それは一般的な唱へ方でして、枕カバーをするか敷布をするか具體的に豫定しておく必要があります。そこで豫め地方の狀況・風習等を研究しておき、食物について見れば一般に榮養過多の偏食・調理の變化・新奇を好み風味に關心をもち過ぎるところと、榮養觀念乏しく出費の顧慮及び勞力を惜しむの弊ある農村とは自ら取扱ひに手加減を要します。又服裝問題については、高二第十五課に「今日の衣服には和服があり洋服があり、又用途から見れば平常服・訪問服・禮服に分ける事が出來る。平常服は衞生上に遺憾がなく、活動に便利であり、耐久性に富み、而も廉價なのが良い。」とありますが、この「遺憾がない」「活動に便利」の意味を十分吟味し、何が一番衞生的な要素であり、何が一番活動に便利であるかと云ふ具體的問題は其の地方に適合する樣考案しなければなりません。

四、見本的雛型的教授にならぬ樣

學校家事が實生活に役立たないと非難されるのは其の原因が雛形的教授、見本萬能の教授に終つたからで今後大いに反省しなければなりません。學理に基き技能的には或程度の熟練を必要とします。それには其の方法として或程度迄反覆練習するより外ありません。

五、家庭生活の合理化を目標として

高二第三十五課家庭生活の合理化の處で「家庭生活に於ける日常の生活を、只舊來の習慣に從つてのみ營むものでなく、學問や經驗で明かにせられた理法に照して、捨つべきは捨て採るべきは採つて、道理に適した生活法に改める事を家庭生活の合理化といふ。」と出てゐますが、眞の合理化の意味を明かにし「道理に適した」を吟味して數量を明記して正確な觀念を得

させ兒童の能力相應に物の理由を理解させ、思考しつゝ生活する態度を養成しなければなりません。掃除の取扱ひ等は適切で理解し易い例であります。

六、新教科書が實生活につき其の社會性を强調した點に主力を注ぐこと

高一第一課「女子と家事」の處で「其の勤め振りのよしあしは、直ちに一家の幸不幸に關係し、延いては、一國の盛衰にも響くものである。」と述べてあり、敬老の課を新に加へて、色々老人につくす道を說き「この事は我國古來の美風の一つであつて」とあるやうに先づ家から治め大きく國に及すことを目的としてゐます。又國民體格の向上を圖る方法として食物教材を重視しその四五%が食物に關する教材となつてゐる點等教授に手心を加へその精神を汲み取らねばなりません。

七、國家的國民性を表現する行事の取扱

端午の節句・雛節句・七夕祭等長い歷史を持つ行事は今後如何に科學文明が發達しようとも持續したいものであります。

尙教科書に特別項を設けてはありませんが、教授の際使用する教具等現在の前後を語るに足る物を選び活用させるとか、又公共物、他人の物品は之を鄭重に扱ふ習慣を養ひたいものであります。例へば借家に住つた時の心得としては、個人の物は大きく見れば國家の物でありますから之を大切に扱ふといふ心掛が大切であります。

新教科書は教材の選擇・排列文章・挿畫等兒童本位である故、其の取扱ひは體驗させなければなりません。即ち實習中心で兒童の生活に基調をおき、より高いものに益々向上發展させるところに指導の目的があります。生活の向上も之によつて出來ます。概念的でなく實習中に原理・原則をつかませ、良い習慣を作りたいものであります。爲に、從來の樣に結果ばかりを重んじたのは眞面目な眞劍な學習態度を養ふに不十分であります。美しい結果を得る爲には過程が必要であります。主觀的な手心の家事で終つてはなりません。分量・時間等何等標準のない事は勞力・時間・經濟等を考へるとき、熟練した手加減に至る迄の過程を重視し特に數量的に頭を働かせ、人間生活の本質的なものと合致せねばなりません。割烹と榮養についても、食物は生命に直接關係を持つ榮養が根本で理論としては食物の成分、献立の原則を說き榮養上から考へて要求量に近い溫量と成分が適當でありますが、調理法と相まつて十分であるかをも考へねばなりません。

要は此の教科を通して養はれる効果は勤勞・秩序・淸潔・整頓・周密等の良習慣を得させ結果ばかりに重きをおかず過程を重んじて仕事の手順・方法を計畫し合理的に實習をさせ、その後片付を淸潔に手早くする樣習慣づけ、働くことを樂しむ態度をつくりたいものであります。

八、指導の目的の上から見た缺陷

家事教授の目的は「家事教授の要旨」にある樣に

一、家事に關する普通の知識技能を得しむること。

一、家事の趣味を長ずること。

一、節約・利用・秩序・淸潔の習慣を養ふ。

あとります。ところがその知識方面での普通の知識技能を得しむるといふ事について考察する時は、非科學的・非實際的であります。常識で判り過ぎた事ばかり教へて何も之を發達促進させる科學の內容を含んで居ない缺點があります。其の上實生活に迂遠な事を知らせて、直接眼前の役に立たないため兒童自身の家庭にあてはめて實地に練習し、改良を加へて行く氣持が起りません。從つて家事に對する趣味の助長なんか出來ないのが當然であります。

能力方面では、工夫應用の精神が練磨されてゐません。學校で習つた事を其のまゝ繰り返す事は容易に出來ますが、少しでも條件が加つたり、材料や用具が違ふともうどうすることも出來ません。習つた事を根本にして自ら工夫をこらし、應用

して之に改善を加へやうとする精神が乏しい様であります。之は教授の要旨には出てゐませんが、限られた學校の家事の時間内に家事百般の事柄を學習させることは到底不可能な事であります。そこで基本的代表的の教材を選擇して學習させ工夫研究して行く事の出來るやうに指導したいものであります。

又節約・利用・秩序・清潔の道德的習慣を養ふについて注意するやう要旨に明示されてゐます。之は特に實習の時に養はれるのでありますが、どうかすると、實習上の材料・時間・勞力等を亂費してゐますが、家庭が一つの經濟機構であつた時代は過ぎ去つたのであります。從來は自己の生活安易に經濟の目標を置かれてゐましたが、今後の家事は國家として社會の一人として社會的立場に立つた判斷によつて進む家事でなければなりません。

九、割烹指導上の缺陷

生産本位の料理實習になり易い傾がありますが、之は主に實習の技術に關するものでありまして中間の過程よりも、結果である實習の成績、つまり外形の善美であることばかり急ぐ點であります。其の結果と過程との必然的内部關係を知る事によつて教育的價値を發揮するものでありますから、結果を重んずると同様に其の過程をも重要視しなければなりません。

實習中の教室の整理や器具の使用整頓がどうであらうとかまはず、實習後の後始末はどうでもかまはぬ、手段に無頓着で豫定のものを作り出す主義の料理實習であつてはならないと思ひます。

1、日常料理指導に力を注ぐこと

日常料理の指導に力を注ぎ平素用ふる材料をより安價に、より美味に食する方法を研究する事はあまりしないで、人を招待する場合の料理等の特殊的御馳走の練習に力を注ぐ弊はないでせうか。これも必要でせうが、兒童の家庭で早速役立つものを指導したいものだと思ひます。

2、榮養本位の食物を攝取したい。

在來の缺陷は榮養の方面より趣味と嗜好と配合が主になつてゐましたが、榮養方面に改善を施さねばなりません。各榮養の適量の配合、それ等榮養分を失はない料理の方法・消化吸收率を大きくする料理法・必要な食量の限界等に關して豊かな知識と技倆を得させたいものであります。

3、經濟的な調理をしたい。

計畫をしないで實習にとりかゝり、多大の勞力を要する等の態度はよくないと思ひます。最初から、目的を定め、計畫通り遂行して行くことの出來る様平素の學習を指導して行きたいものだとおもひます。

4、材料に對する研究を十分したい。

購入した材料の生産地を考慮し、生産品の季節及び價格の高低を研究して、商店に於ける商品の比較をして出來るだけ安價でもつて良品を求めて實習材料として、延いては家庭の日常必需品の購買法向上の指導をすることは教授上必要なことであります。

一〇、創造的態度の養成

家庭内の文化は社會國家の文化と何等の關係なく發展するものではありません。一家は社會國家を構成してゐる細胞でありますから、互に密接な關係をもつてゐます。ですから社會國家の文化が益々發達しまして、其の組織施設が完全に進むに從つて、各家庭の文化も亦進んで來ます。

この様に家庭が社會國家の組織施設から保護恩惠を受けて、安寧幸福になるのでありますから、家庭の文化を進めるには社會國家の文化を家庭に取入れて、これを體系化することを見逃してはなりません。さうして文化活動は創造生活の活動であ

りますから、社會國家のそれと同樣に、其の活動度が大きくなりますと一家の文化的發達も亦大きくなる筈であります。家庭の安寧幸福はその家人の創造的活動の大小によるのでありきす。

隨つて家事の研究は文化創造の活動を目標としまして、兒童の家事學習は兒童として創造的活動を指導し、やがては獨立して、活動が出來る樣導かねばなりません。

一一、指導者の態度

以上擧げました樣に幾多の缺陷を見出しまして、たゞ之を喞つばかりでなく、其の進歩はたとひ遲々たるものでありましても改善への努力、向上への熱意を以つて、兒童と共に家庭精神を基調とした共同生活の家事的雰圍氣をつくり、此の雰圍氣の中に日本女性としての個人的社會的の人格を築くのであります。

それには教師として先づ理論に明るく、技術に熟達してゐる事は誠に力強い事であります。知識と技能が圓滿に發達してゐて熱のある教師に指導せられ、客觀化せられる兒童は實に幸福であります。之は私達のたゆみなき不斷の修養にまたなければなりません。

更に兒童を指導啓發するには先づ其の子供をよく知つて兒童の衷心からの叫びを聞き、然る後之に適應した方針をたて全我を沒入して「入我我入」の境に之が徹底を期すべきであります。

子供をよく知るのは教へるの始めであります。特に家事教育は兒童の家庭内の家事生活を學校にとり入れて指導啓發するのでありますから、教師として教授にとりかゝる前にあたり、兒童調査は勿論其の環境の調査をして指導の根本とし、確呼たる信念の下に、絶えずゆるぎのない指導したいものであります。

昭和十一年十一月一日印刷
昭和十一年十一月五日發行　【非賣品】

編者　大熊庄五郎
香川縣師範學校附屬小學校

發行者　代表者　大熊庄五郎

印刷者　高松市南瓦町四一六ノ二　田村市太郎

印刷所　高松市南瓦町四六一ノ二　日本印刷所

終